

## 委員会先進地視察報告書総括表

1 視察日	令和 7年 10月 8日 ~ 10月 10日	
2 視察地・項目	① 長崎 県 平戸 (市) 町	
	② 福岡 県 宗像 (市) 町	
	③ 大分 県 宇佐 (市) 町	
	④ 県 市・町	
3 参加者	1. 堀内 学 委員長	7. 里脇 清隆 委員
	2. 南波 伸孝 副委員長	8. 村上 秀明 委員
	3. 高見 龍也 委員	9. 森 啓之 農林水産振興課係長
	4. 水上 享 委員	10. 友野 和成 書記
	5. 田中 博文 委員	11.
	6. 山口 弘宣 委員	12.
4 視察経費	354,840 円 ※ ( 10 ) 人分	

# 委員会先進地視察報告書

報告者 堀内 学

1 視察日	令和 7 年 10 月 8 日		
2 視察地	長崎県平戸市		
3 参加者	経済建設委員会		
	1 堀内 学 委員長	5 水上 享 委員	9 森 啓之 農林水産振興課係長
	2 南波 伸孝 副委員長	6 里脇 清隆 委員	10 友野 和成 事務局書記
	3 村上 秀明 委員	7 田中 博文 委員	
	4 山口 弘宣 委員	8 高見 龍也 委員	
4 視察項目	根獅子・飯良地区農村 RMO の取り組みについて		
5 視察先 選定理由・目的	人口減少や高齢化が進む地域における RMO の設立経緯と活動内容を学ぶ。 農用地の保全活動や地域資源の活用、生活支援といった事業の連携事例を調査し 行政と地域住民との連携方法、課題解決に向けた工夫を視察する。		
6 視察内容	<p>2025 年 10 月 8 日</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・視察先：平戸市根獅子・飯良まちづくり運営協議会（農村 RMO）</li><li>・農村 RMO（農村型地域運営組織）とは、高齢化や人口減少が進む農村地域で、集落機能を維持・強化するために、複数の集落が連携して「農用地の保全」「地域資源の活用」「生活支援」の 3 つの事業に取り組む組織</li></ul> <h2>1. 根獅子・飯良地区農村 RMO の取り組み</h2> <p>(1) 組織体制と目的</p> <p>根獅子飯良まちづくり運営協議会は、地域の魅力や生活環境の向上を目指して住民主体で運営されています。この組織は、地域経営指針に基づき、地域の課題解決に向けた持続的な取り組みを実践しており、平戸市の協働のまちづくり条例に則って交付金を受け、運営している。行政の支援で使われていない保育所施設をメンテナンスし、活動拠点とされており、厨房を改良して工房を整備し、特産品を使った商品開発に取り組んでいる</p> <p>（農林水産省や長崎県の普及指導員、地元の金融機関など、外部機関の支援を積極的に活用している）</p> <p>(2) 主な活動内容</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・農用地の保全</li></ul> <p>担い手不足による荒廃農地の増加に対し、共同での草刈りや農地管理活動を実施し、また景観維持を目的とした活動も行っており、地域の魅力を高めることに貢献している。</p>		

- ・地域資源の活用

伝統的な農業技術の継承や、地域の特産品を活用した加工品の開発など、農業を核とした経済活動を模索している。

かくれキリシタン信仰の歴史（ウシワキの森など）といった文化遺産を観光資源として活用し、交流人口の増加を図っている。

- ・生活支援

高齢者の買い物支援や見守り活動など、地域住民の生活を支える取り組みを実施し、地域住民の交流の場を創出し、コミュニティ維持に努めている。

### (3) 組織運営の工夫

- ・多様な主体との連携

行政だけでなく、外部専門家や民間企業と連携することで、専門的な知識やノウハウを取り入れている。

- ・段階的な取り組み

最初から大規模な事業を目指すのではなく、地域住民が参加しやすい小規模な活動から始め、徐々に事業を拡大している。

- ・情報共有の徹底

運営協議会の会議や研修会などを通じて、地域住民と活動内容や成果を共有し、モチベーションを維持している。

### (4) 成果

*農業への関心の再燃 荒廃農地の保全と活用計画の実施 地域内経済活動の活性化*

- ・荒廃農地解消と生産者拡大を目標とした植栽実証展示園

→荒廃農地に景観形成と収益性のあり、管理作業が少なく苗の入手が可能な枝物を植栽（銀葉アカシア、ヒバ、ナンキンハゼ、ドウダンツツジなど）



① 地域活力の維持：高齢化による集落機能の低下を補完し、地域コミュニティの維持に貢献している。

② 多角的な事業展開：農業だけでなく、観光や生活支援など多様な事業を組み合わせることで、地域経済の活性化につながる可能性を示している。

	<h2>2. 課題と今後の展望</h2> <p>(1) 課題</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 担い手の確保 新たな担い手（特に若い世代）の確保が依然として課題となっている。</li> <li>② 財源の確保 補助金に頼らない、自立した事業運営のための財源確保が必要。</li> <li>③ 組織の持続性 運営協議会の役員の高齢化など、組織の継続性に対する懸念がある。</li> </ul> <p>(2) 今後の展望</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 事業の収益化地域資源を活用した事業の収益性を高め、自立した運営を目指す。 広域連携：近隣の RMO や自治体との連携を強化し、事業規模の拡大や効率化を図る。</li> <li>② デジタル技術の活用：遠隔地からの参加を可能にするオンラインツールや、情報共有のためのシステム導入を検討する。</li> </ul>
7 委員会所見	<p>平戸市根獅子農村 RMO は、行政と地域住民、外部機関が連携することで、中山間地域の課題解決に果敢に挑戦している模範的な事例でした。特に、多様な事業を組み合わせることで、地域の活力を維持し、将来を見据えた活動を展開している点は高く評価できます。今後は、担い手の確保や財源の安定化といった課題に対し、さらなる工夫を凝らすことが期待されます。本視察で得られた学びを、今後の地域づくり施策に活かしていくことが重要だと感じました。本市でも数年前から農福連携に取り組み、障がい者の方々の就労や生きがいづくりの場を生み出し、担い手不足や高齢化が進む農業分野での新たな確保に繋がっているが、農産物の庭先集荷、配達等、具体的な更なる支援体制の必要性を感じました。</p>

# 委員会先進地視察報告書

報告者 高見 龍也

1 視察日	令和 7 年10月 9日	
2 視察地	福岡県宗像市 道の駅 むなかた	
3 参加者	経済建設委員会	
	1. 堀内 学 委員長	6. 里脇 清隆 委員
	2. 南波 伸孝 副委員長	7. 田中 博文 委員
	3. 村上 秀明 委員	8. 高見 龍也 委員
	4. 山口 弘宣 委員	9. 友野 和成 議会事務局書記
	5. 水上 享 委員	10.
4 視察項目	「道の駅 むなかた」の概要、現在の課題、今後の展望など	
5 視察先選定理由・目的	「じゃらん全国道の駅グランプリ2025」の「満足度の高い道の駅」「もう一度利用したい道の駅」両ランキングで全国1230の道の駅中第2位に選ばれるほど評価が高い要因を教えていただき、大村市の今後の地域活性化の参考にするため	
6 視察内容	<ul style="list-style-type: none"><li>① 平成20年4月に「観光物産館」として開館(株式会社道の駅むなかたの運営)</li><li>② 合併特例債を利用して建設した。</li><li>③ 平成平成27年4月に社名変更して第3セクターとして運営 資本金500万円(宗像市商工会20%、宗像農業協同組合20%、宗像観光協会20%、宗像漁業協同組合20%、宗像市20%)</li><li>④ プロモーション戦略担当職員を置いた。そして、ホームページ、SNS、ライン JAF の情報誌、地元のフリーペーパーなどで広報活動をしている。また、テレビ局の取材が入ったときは特に反響が大きかった。あらためてテレビ・メディアの影響力の大きさを感じた。</li><li>⑤ 敷地面積約30,000㎡で、県内有数の広さ</li><li>⑥ 観光物産館、レストラン、米粉パン工房、アンテナショップ、多目的ホール、花木園芸、工芸雑貨のお店、芝生広場、多目的広場、ペットふれあい広場などで施設の魅力アップ</li><li>⑦ 2015年～2024年の売上高平均は約16億6,500万円</li><li>⑧ 77%は地域外からの利用客(福岡市と北九州市という大都市に挟まれた好立地条件)</li><li>⑨ 年齢別利用者割合は50代以上で74%を占めるので、将来への戦略を練る必要有り</li><li>⑩ 今後は、宗像大社の帰りに寄ってもらえるような戦略を考えたい。</li></ul>	
7 委員会所見	<ul style="list-style-type: none"><li>・第3セクターにすることによって、利潤追求のみではなく、「地域経済の活性化」を重点目標にして経営することができている。</li><li>・「じゃらん全国道の駅グランプリ2025」の「満足度の高い道の駅」「もう一度利用したい道の駅」両ランキングで全国1230の道の駅中第2位に選ばれるほど評価が高い理由は理解できた。しかし、昨年度は赤字だったことを聞くと、黒字化するために工夫をするべきだと思った。具体的には<ul style="list-style-type: none"><li>① 出品販売の利用料金の率を上げること</li><li>② 令和7年4月現在の事務局職員数が63名いるので、機械化などを進めて人件費を削減すること</li></ul></li><li>・客単価が、観光物産館で2,836円、レストランで2,727円ということであった。地域経済全体を考えた場合には、宿泊する観光客を増加させる政策の検討も必要ではないかと感じた。</li></ul>	

# 委員会先進地視察報告書

報告者 南波 伸孝

1 視察日	令和 7年 10月 10日	
2 視察地	大分県 宇佐市	
3 参加者	経済建設委員会	
	1. 堀内 学 委員長	6. 山口 弘宣 委員
	2. 南波 伸孝 副委員長	7. 田中 博文 委員
	3. 村上 秀明 委員	8. 高見 龍也 委員
	4. 里脇 清隆 委員	9. 友野 和成 書記
	5. 水上 享 委員	10.
4 視察項目	宇佐市6次産業化の取り組みについて	
5 視察先選定理由・目的	宇佐市における6次産業化の取り組みについて研修する。特に、ブランド商品創出の取り組み方、独自産業の取り組み促進、地域連携などについて学び、大村市の課題解決に活用するヒントを得ること。	
6 視察内容	<p><b>宇佐市概況</b></p> <p>宇佐市は、平成17年3月31日に旧宇佐市、旧院内町、旧安心院町が合併し、本年度で合併20周年を迎えた。現在の人口は約5万1千人（本年9月現在）で、合併当初の6万800人から約14%の減少となっている。総面積440平方キロメートルのうち、約55%が山林で占められている。</p> <p>宇佐市の特徴として、全国八幡宮の総社である宇佐神宮を有しており、本年度は御鎮座1300年の節目の年である。また、昭和の大横綱である双葉山の生誕の地であり、下町のナポレオンとして知られる焼酎「いいちこ」の本社が宇佐市にある。</p> <p><b>6次産業化の定義と経緯</b></p> <p>宇佐市における6次産業化の定義：宇佐市では、原料生産から加工、販売までを一体的に取り組むことで、競争力のある高付加価値の特産品を創り出すことを指す。一般に「1次産業×2次産業×3次産業＝6次産業」と例えられるが、宇佐市では「1×2」や「1×3」など、必ずしもすべてを掛け合わせる形にこだわらず、農商工の機能連携を図ることで、農山漁村の総合産業化を位置づけている。</p> <p>経緯：宇佐市の6次産業化の取り組みは、約15～16年前に前市長の是永氏の公約として始まり、当時は県下でも最先端の取り組みであった。当初は農政課が所管していたが、現在は新設された観光ブランド化が担っている。</p> <p><b>6次産業化推進のための主な施策</b></p> <p>宇佐市では、「宇佐市6次産業創造ビジョン」（現在第三期、期間延長中）に基づき、以下の4つの柱で事業を推進している。</p> <p>1. 人材のスキルアップ事業</p>	

- ・ セミナーの実施：事業者の商品 PR や販路拡大のため、バイヤーや動画撮影の専門家等を講師に招き、セミナーを毎年実施（30 回以上）。近年は内容の新鮮味を保つため、少人数の新たな形式で開催している。
- ・ 専門家の派遣：パッケージデザイン開発やブランディング、特に毎年制度が変わる食品表示のチェックのため、専門家を派遣し、支援を行っている。

## 2. 資源のブラッシュアップ事業（特産品の推進）

宇佐市では、以下の特産品を重点的に推進している。

戦略品目	特徴および取り組み
ブドウ	寒暖差の激しい安心院地域で栽培され、 <b>西日本有数の生産量</b> を誇る。シャインマスカットは初競りで 5kg 35 万円の実績がある。ワインやドライフルーツなどの加工品も製造されている。
味一ねぎ	県内で生産される小ネギのブランド名。ネギ焼きやネギしゃぶなど、 <b>素材の味を楽しむ料理</b> として PR。セブン-イレブンとのコラボ商品（4 商品）の販売や、提供店と連携した「味一ねぎキャンペーン」を実施。
院内ゆず	水の恵み豊かな院内地域を中心に栽培され、 <b>西日本有数の生産量</b> 。加工品支援のほか、冬至の時期に市内の温泉や大分空港の足湯にゆずを浮かべる「冬至・ゆずの日」を実施し、周知を図っている。
宇佐クロダマル	九州の気候に適したプライズ品種の黒大豆で、苦みが少なく甘みが強いのが特徴。平成 21 年から栽培開始し、現在では <b>全国有数の生産量</b> を誇る。商品開発支援や、県内商業施設での枝豆販売を実施。
ドジョウ	<b>泥を使わない技術</b> で養殖され、養殖生産量は日本一（年間約 13 トン）。地元消費拡大が課題であり（市内で食べられるのは 1% ほど）、高校での調理実習や「どじょうの丑の日」フェアを開催し、普及に努めている。
七蔵	「発酵と醸造のまち宇佐」として、7 つの酒蔵の PR を強化。宇佐神宮御鎮座 1300 年記念のラベルセット製造販売なども行っている。

## 3. ブランドのチャームアップ事業

- ・ 宇佐ブランド認証制度：平成 25 年度から開始。現在、55 事業者、106 商品が認証されている。
  - 認証委員会：百貨店のバイヤー、食品表示の専門家、物流の専門家、元バイヤーなどで構成され、審査は厳しい。
  - 運用：3 年に一度更新審査を実施し、認証品はロゴマークを使用可能となる。認証事業者は年間 1 万円の負担金を支払う。
  - PR 活動：観光大使であるサッカー選手石川周作選手などの著名人を活用した SNS 発信。JR 柳ヶ浦駅には、コロナ臨時交付金を活用した地域産物自動販売機を設置し、順調な売上を上げている。

## 4. 最新のシステムアップ事業

- ・ 地域商社「USA」の設立：一昨年（令和 4 年）4 月に、宇佐市、宇佐商工会議所、宇佐両院商工会の三者構成で設立。市の異動による継続支援の途切れや、酒類販売免許がないなどの市の限界を克服し、民間ノウハウ

	<p>を生かした手厚い事業者支援を行うことを目的としている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 体制：市と商工会、農協などで構成される「6次産業推進協議会」と、「宇佐ブランド認証委員会」があり、これらが「推進本部」の元で連携する体制をとっている。</li> </ul> <p><b>事業成果と課題</b></p> <p>事業成果：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 所得の向上と契約栽培：地元酒造メーカーによる「西の星」の例では、生産者と播種前契約を結び、大麦を全量買い取りする仕組みがあり、また、スターフーズ株式会社も地元の小麦の優先買取を行い所得保障につながっている。</li> <li>・ ブランドの浸透：ブランド認証シールを貼ることで、商談会におけるバイヤーの食いつきが良くなるなど、一定の成果を得ている。</li> <li>・ 高付加価値化の成功例：安心院ワインが国際的な評価を得、安倍元首相がプーチン大統領を招いた際の乾杯酒に使われるなどの事例がある。</li> </ul> <p>課題および今後の展望：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 課題： <ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 認証事業者間での意識の温度差がある。</li> <li>◦ 小ロット生産・加工事業者が多く、都市圏進出に必要な大量発注に対応できる設備や人員が不足している。</li> <li>◦ 宇佐ブランド認証制度の県外での認知度が低い。</li> </ul> </li> <li>・ 展望： <ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 事業者同士の交流会を開催し、OEM生産を見据えた加工事業者とのマッチング機会を創出する。</li> <li>◦ 地域商社を中心に、福岡や関西圏へ向けたプロモーションを行い、宇佐ブランドを浸透させていきたい。</li> </ul> </li> </ul>
7 委員会所見	<p>大村市は、50年連続で人口が増加し、まもなく10万人を突破しようとしています。農業従事者の減少や高齢化、担い手不足といった課題も抱えています。このような中で、宇佐市の取り組みから学ぶことが多いと感じました。</p> <p>まず、宇佐市の契約栽培と所得保障の仕組みです。地場産品の全量買い取りを通じて、生産者の意欲を高め、所得の安定化を図っています。このモデルは安心して作物を育てられる環境を整えることが地域農業の活性化につながるのではないかと感じました。</p> <p>次に、地域商社の活用です。宇佐市では、民間のノウハウを活かし、事業者支援や販路開拓を行う地域商社が設立されています。これにより、地元特産品の知名度向上と地域全体の活性化が期待できます。</p> <p>最後に、若年層への働きかけです。宇佐市では高校生を対象に、地産地消や郷土料理への関心を深める活動が進められています。</p> <p>これらの宇佐市の取り組みは、大村市が6次産業化やブランド化を推進する上での重要なヒントとなる視察になりました。</p>